

太田尚樹 著

『支倉常長遣欧使節もうひとつの遺産：その旅路と日本（ハボン）姓スペイン人たち』

（山川出版社、2013年）

評者 坂東 省次

今年、日本・スペイン交流400年を迎えるに当たって、すでに昨年、濱田直嗣『政宗の夢 常長の現 慶長使節四百年』（河北新報出版センター）が出版され、今年になって太田尚樹『支倉常長遣欧使節もうひとつの遺産：その旅路と日本（ハボン）姓スペイン人たち』と大泉光一『キリシタン將軍伊達政宗』（柏書房）が相次いで刊行された。

慶長遣欧使節に関しては、すでに松田毅一『慶長遣欧使節—徳川家康と南蛮人』、五野井隆史『人物叢書 支倉常長』、田中英道『支倉常長 武士、ローマを進行す』などがあり、慶長遣欧使節の研究書は出揃った感がする。

さて本書『支倉常長遣欧使節もうひとつの遺産：その旅路と日本（ハボン）姓スペイン人たち』（以下『支倉』）の著者太田尚樹にはすでに『ヨーロッパに消えたサムライたち』（角川書店、1999年）があり、『支倉』ではそれを土台にして特に日本（ハボン）姓のスペイン人たちのことを再考したもので、エッセイ風に書かれた読み物である。全4章から成る。

第1章「支倉使節団とは何か」で著者は、慶長遣欧使節の目的として南蛮交易、独立国家の建設、さらには地震からの復興対策を挙げている。南蛮交易はすでに定説である。独立国家の建設の考えは、大泉氏の著書からの引用である。また地震からの復興説は濱田氏の著書からの引用である。

慶長遣欧使節が1613年に日本を発つ2年前の1611年、三陸で大地震があり、ここから濱田は、慶長三陸地震の復興対策として慶長遣欧使節が派遣されたのではないかという新しい説を出したのである。ただし、あくまで想像の域を出ない説ではある。

第2章「使節団の足跡を訪ねて一月浦（石巻市）からローマまで」は、慶長遣欧使節が日本を出発した月浦から始まってメキシコ、ハバナ、セビリア、マドリード、バルセロナ、ジェノバそしてローマに至る使節団の足跡の訪問記である。1616年1月7日、遣欧使節がローマを発つ日、著者は常長はじめサムライたちのその後の運命

を次のように述べている。「栄光の日々の後の、空しさと先が見えてこない不安を抱きつつ、一縷の望みを託してイスパニアに戻って行く彼ら、それは聖の世界から俗の世界に回帰していく旅路である。日本に帰っていく者、コリア・デル・リオに残る者、瀧野嘉兵衛のように、独り孤独な道を歩む者。それぞれの運命に向かって、ローマを後にしていった。」

著者は、遣欧使節のサムライの一部がコリア・デル・リオに残ったと考えている。ここから日本（ハボン）姓のスペイン人説が生まれる。

第3章「サムライの末裔伝説を追って」で著者は、日本（ハボン）姓が遣欧使節の末裔であると考えた理由を「痕跡」として次の5つを挙げている。痕跡①17世紀の洗礼台帳、痕跡②消去法から浮かぶ8名の未帰還者、痕跡③苗床から育てる稲作、痕跡④日本（ハボン）姓の子孫に伝わった日本語、痕跡⑤日本（ハボン）姓の子供に見られる蒙古斑、である。

言うまでもなく、なによりも重要なのは、スペインに残ったサムライが本当にいたのかどうかであるが、著者は結論として、遣欧使節のなかで日本に帰らなかった可能性の高いのは11人で、このうちコリア・デル・リオには8人が残ったと考えている。具体的には、野間半兵衛、神尾弥治右衛門、山口勘十郎、佐藤太郎左衛門、原田勘右衛門、山口勘助、伊丹宗巳、名字を持たない茂兵衛、九蔵、藤九郎、助一郎ら11名のなかの8人であるという。

現在、コリア・デル・リオには日本（ハボン）姓の住民が600人程度住んでいるといわれる。著者は考察を重ねた結果、彼らはスペインに残留したサムライたちの子孫であると考え、その理由をいろいろ提案しているが何れも決定的なものではなく、あくまで推測の域を出ていない。そんな中、いよいよDNA鑑定が行われる。しかしながら、ハボンさんたちは結果がどうであれ自分たちのルーツは日本にあると信じて疑わない姿勢を見せている。

ばんどう しょうじ（教授・日西交流史）